

□ 次の①～⑩の——の漢字の読みをひらがなで答え、カタカナを漢字に直しなさい。

- ① 彼は大会成功の立役者といえる。
- ② 善意を逆手に取るようなことはやめよう。
- ③ 昨日から悪寒が激しい。
- ④ 成長のため失敗を自己シンコクする。
- ⑤ 戦争をはさんで世代間のダンゼツがある。
- ⑥ 新校舎ラクセイの祝賀会が開かれる。
- ⑦ 二つの物質を配合してソウジョウ効果をねらう。
- ⑧ 作業工程がサイブン化されている。
- ⑨ ケイソツな行動はつつしむべきだ。
- ⑩ 学校内の成績のジョレツをつける。

□ 次の文章をよく読んで、後の問いに答えなさい。(問題に字数制限のある場合は、すべて句読点・符号をふくむものとする。)

情報化社会と言われる現代。以前だったら貴重なものであった情報も、簡単に手に入るようになった。

たとえば映画がそうである。今では、たいていの映画はDVDで手に入り、好きな時、場所で再生を始めることができる。①途中で止めたくなったら一時停止ボタンを押せばよい。しばらく経って、続きを観ることもできる。

人間の都合に合わせて、映画をコマギレに鑑賞できる時代になった。そのうち、インターネットを通して「ビデオ・オン・デマンド(視聴者が映像を観たいときに観られる映像配信システム)」で映画を観るのが普通になるだろう。以前は②そうではなかった。映画は、ロードショーにせよ、旧作・名作の再上映にせよ、劇場に行かなければ観ることができなかった。一所懸命スケジュールを調べて、その時間に合わせて出かけた。

映画館で観る映画と、家庭などでDVDを通して観る映画の間には、体験の質として大きな差がある。画質や臨場感などはもちろんだが、映画という体験を支える「時間」の性質の違いが案外大きな意味を持つと思う。

映画館の場合、上映時間が決まっているから、もし遅れると見逃してしまう。遅れて到着してもう始まっていたとしても、それは自分のせいである。映画はこちらの都合に関係なく決められたペースで勝手に上映されており、観客は好むと好まざるとにかかわらずその上映スケジュールに合わせるしかない。

③観客は映画の時間に「寄り添う」しかなかった。「映画の時間」に「自分の時間」を合わせていたのである。

最近の映画館では、「最初から最後まできちんと観る」という習慣が定着していて、休憩時間にしか入場させないところも多い。以前はもっと緩やかだった。特に「二本立て」の上映では、交互に繰り返される二つの映画の上映中、いつでも入れる、という映画館がほとんどだった。

私が子どもの頃、よく行っていた映画館も、いつでも入退場できた。学校が休みの時期など、ゴジラやモスラなどの

怪獣映画がかかって、仲間たちと観に行った。子どものことだから集合時間もいい加減で、ずっと楽しみにしていた玉の作品でも、平気で途中から入っていた。

ストーリーが進んでしまっていて、重要な伏線や端緒（Ⅱはじまり）がわからなくても、気にせずに映画を楽しんだ。そして、二回目の鑑賞時に最初から観て、「そうか、あの事件はそういう理由で起きていたのか」「犯人はあんなふう証拠を隠したのか」などと頭の中でつないで、それなりに満足していた。映画のストーリーに即して言えば「タイム・トリップ」をしているようなものだったが、④それでも構わなかったのである。

入場した時に流れていたシーンになると、「ここから先はさつき観たから、もういいや」と席を立つせつかな仲間もいたが、私はどちらかと言えば、もう一度最後まで観て、味わい尽くすのが好きだった。ポップコーンやポテトチップスを食べながら、仲間とわいわい楽しく観たあの頃が懐かしい。

映画を途中から観て、二回目ですれをつなぐ。昔の映画館に行っていた人ならば、誰でも経験していることなのではないか。作品としての映画をきちんと楽しもうと思ったなら、やはり最初から鑑賞すべきだ。随分いい加減な時代もあったものだと思う。

その一方で、人間の脳の働きという視点から見ると、当時の「⑤乱暴な」映画体験にはなかなか味わい深い側面があるのも事実である。

映画に限らず、人生の中の「生の体験」には、編集、整理されて、ある特定の意味に解釈される前の様々なノイズ（Ⅱ雑音）が入っている。⑥そのような乱雑さこそが脳を育てる栄養になる。映画を途中から観てしまい、二度目にストーリーをつなぐ。無茶なようである、その雑な体験の中にこそ、私たちの脳を育む大切な滋養があるのである。

現代の生活の中で私たちが受け取る情報は、**A** 整理され、丁寧に表現され過ぎているのではないか。いつの頃からか、テレビにおける発言にはテロップ（Ⅱ字幕）が付けられ、わかりやすさが保証されるのが当たり前になっている。ノイズの中から意味を拾うというのが人間の脳の強靱な編集力の本質。最近の⑦至れり尽くせりの情報環境では、

脳の潜在能力を活かすことができない。

B、劇場の場合、私たちの都合で「一時停止」できない形で上映されることは、映画という体験の「生命」そのものに関わっている。

大ヒットした携帯型ゲーム「たまごっち」の開発者として知られる横井昭裕氏にお目にかかったことがある。

「たまごっち」は、ペットを育成するゲームだが、モニター段階で要望が多かった「一時停止ボタン」を横井さんは考えて付けなかったのだという。「一度始めたら、こちらの都合で一時停止などできないということが、ペットの本質だと考えたからです」と横井さんは言う。

考えてみれば、生命の本質とは、停止することのない⑧綿々とした流れである。こちらの都合でストップしたり、再び開始できるものではない。だからこそペットの世話には面倒なのだが、**C** 愛しい。

子どもの頃、暗い劇場に入り、もうすでに始まっている映画を目にした時、私はそこに一つの生命を感じていたのかもしれない。何でも「一時停止」できる現代の私たちは、次第に「生命」の気配を失ってはいないか。

（茂木 健一郎著『それでも脳はたくらむ』一部改変）

問一——①「途中で止めたくなったら一時停止ボタンを押せばよい。しばらく経って、続きを観ることもできる」とありますが、このことについて、筆者はどのように考えていますか。「生命」という言葉を使って、「〜と考えている。」という表現につながるように、十字以上二十字以内で答えなさい。

問二——②「そうではなかった」とはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 映画は、観る人間の都合に合わせて、コマギレに鑑賞することが可能になったということ。
- イ 映画は、観る人間の都合に関係なく、決められた時間に映画館で上映されていたということ。
- ウ 映画は、インターネットを通して「ビデオ・オン・デマンド」で観られるとは限らなかったということ。
- エ 映画は、観る人間が「最初から最後まできちんと観る」というわけではなかったということ。

問三——③「観客は映画の時間に『寄り添う』とはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 映画館に行く前に、上映スケジュールを調べてから行くようにすること。
- イ 家庭などでDVDを通して映画を観るのではなく、映画館で観ること。
- ウ 映画館で、映画を最初から最後まできちんと観ることを習慣にすること。
- エ 映画の上映スケジュールに、自分の入場する時間を合わせることに。

問四——④「それでも構わなかった」とはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 映画を途中から観て、二回目で頭の中でつないで理解し、それで良しとすること。
- イ 映画の上映中に平気で途中から入って、重要な部分がわからなくても楽しむこと。
- ウ 途中から観て、入場した時のシーンになると、その先を観ずに帰ること。
- エ 映画のストーリーが多少わからなくても、仲間とわいわい楽しく観て満足すること。

問五——⑤「乱暴な」とありますが、このように言えるのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 映画を途中から観てしまい、二度目にストーリーをつなぐという当時の鑑賞の仕方は、随分いい加減であると言えるから。
- イ 人間の脳の働きという視点から見ると、味わい深い側面があるのも事実であるが、映画を途中から観るということは雑な体験だと言わなければならない。
- ウ 映画は作品としてきちんと最初から鑑賞すべきなのに、当時は途中から観て、二回目でそれをつなぐという形で鑑賞していたから。
- エ 映画の上映中に入場し、お菓子を食べて、仲間とわいわい楽しく観るといふ当時の鑑賞態度は、映画を作品として観る態度とは言えないから。

問六 — ⑥ 「そのような乱雑さこそが脳を育てる栄養になる」とありますが、このように言えるのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ある特定の意味に解釈される前の様々なノイズが、人生の体験の中で編集、整理されていくから。
イ 途中から観た映画のストーリーを二回目でつなぐという編集力は、人間の脳に潜在的にある強靱な能力だから。

ウ 雑な体験の中にこそ、私たちの脳を育む大切な滋養があるが、現在の生活の中で私たちが受け取る情報は整理され過ぎているから。

エ 人生の体験の中にノイズがあることによって、そこから意味を拾うという人間の脳の編集力が高められるから。

問七 本文中の A C に入れるのにふさわしい言葉をそれぞれ次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。
(同じ記号を二度以上使ってはけません。)

ア やむを得ず
イ それゆえに
ウ ともすれば
エ いずれにせよ
オ ところで

問八 — ⑦ 「至れり尽くせり」・ — ⑧ 「綿々とした」の意味として最もふさわしいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

⑦ 「至れり尽くせり」

ア 心づかいが行き届いていて、不足した点がないということ。

イ 気づかいがされ過ぎて、かえって良くないということ。

ウ すみずみまでしっかりと説明されていて、わかりやすさが保証されているということ。

エ 伝えるための目標が明示されていて、頭の中で整理しやすいということ。

⑧ 「綿々とした」

ア 一定のペースが保たれている様子。

イ やわらかくて安定感のある様子。

ウ 長く続いていて絶えない様子。

エ スムーズでしなやかな様子。

〔三〕 次の文章をよく読んで、後の問いに答えなさい。（問題に字数制限のある場合は、すべて句読点・符号をふくむものとする。）

「ついてないわ」

マツチの軸（じく）を灰皿に投げ捨てながら、ママは言った。

「私（わたし）としたことが、とんだ①不覚（ふかく）よ」

仕事から帰るとまずダイニングの椅子（いす）に座（すわ）り込み、煙草（たばこ）一本が灰になるまでの間、ひとしきり愚痴（ぐち）をこぼすのは、毎晩のママの習慣（しゅうへん）だった。けれど②その日のため息は、一段と長く、暗（くろ）かった。

「③どうしたの？」

僕は尋ねた。何があつたか本当（ほんとう）に知りたいからではなく、質問してもらいたくてたまらないのに、僕（だま）が黙（もく）つたままでは、ママがどれほど不機嫌（ふきげん）になるか、よく分かつていたからだ。

「なくしたのよ。集合用の旗（はた）を。ずっと使い続けてきた、ほとんど身体（からだ）の一部と言（い）つてもいい、あの旗（はた）をね」

「どこで？」

「遊覧船（ゆうれんせん）の待合室（まちぐし）だと思う。慌（あわ）てて戻（もど）って探（さが）したけど、見つからなかったわ。誰（だれ）かがゴミだと思（おも）って捨てたのね、きっと」

同情（どうじやう）を誘（さそ）う様子（ようす）で、ママは鼻（はな）をすすつてみせた。それから煙草（お）を押し潰（つぶ）し、夕食（しよく）の支度（したく）をするため、のろのろと立ち上（あ）がった。

僕は言い付け通り、付け合わせの野菜（やさい）は全部洗（あら）って皮（かわ）をむいておいたし、鰯（いわし）は内臓（うちぞう）を取り出し下味（しも）をつけておいた。でもママには、野菜（やさい）を茹（ゆ）でたり、魚（うし）に衣（え）をまぶしてソテーしたりする（＝油（あぶら）などで焼（や）く）仕事（しごと）が残（のこ）っていた。

まだ火（ひ）を使うには子供（こども）すぎます。あなたが一人でガス（ガス）のつまみをカチカチさせているかと思うと、心配（しんぱい）で仕事（しごと）どころ

じゃないわ、というのがママの言い分（いぶん）だった。

余分（よふん）なエネルギーがこれっぽっちも残（のこ）っていないかのようになくたたびれぶり、ママが台所（だいしよ）に立つのを見るたび、④僕は居心地（いこころ）が悪（わる）くなった。自分が何か、余計（よけい）な手出しをしてしまった気分（おちい）に陥（おちい）った。野菜（やさい）と鰯（いわし）のために自分が払（はら）った犠牲（ぎせい）（セカンドのポジションを下級生（げきせい）に譲（ゆず）り、練習試合（れんしゅうしあ）を途中で抜（ぬ）けなければならなかった）のことなど、あつけなく忘れてしま（しま）うのだった。

僕は紙ナプキン、ナイフとフォーク、グラス、水のボトル、バターケースを食卓（しょくたく）に並（なら）べた。向かい合（むかいあ）つて座（すわ）るママと僕（ぼく）が、一ミリのずれもなく対称（たいしやう）になるよう、慎重（しんちょう）に一個一個位置（いちご）を定（さだ）めていった。まるでタイムリーエラーを、挽回（ばんかい）するよう（よう）に。

ママは町（まち）に二人（ふたり）しかいない、公認（こうにん）観光ガイドの一人（ひとり）だ。ただのガイドならいくらでもいるが、試験（しけん）に合格（ごうかく）した本物（ほんぶつ）のガイドになるのは容易（りようい）ではないらしい。自己紹介（じよこかい）をする時（とき）、コウニンという一言（いちご）を付け加（くわ）えるのを、ママは決して忘れな（わ）かった。

十年（じゆん）近く前（まえ）、赤ん坊（あかこ）の僕（ぼく）を連れて。パパと離婚（りこん）して以来（いらい）、ガイドとして働（はたら）きながらAを立ててきた。もつとも、せっかくな難（がた）しい試験（しけん）にパスしても、ママがガイドをするのは、狭（せま）い町（まち）の中（なか）、せいぜいバスで日帰（にっけい）りできる範囲（はんい）のツアーにとどまっていた。しかも旅行会社（りょこうかいし）の社員（そごんいん）ではなく不安定（ふあんてい）なフリーの立場（たてま）で、自分でスケジュールを調整（ていせい）しつつ、観光局（かんくわんきよ）が回（まわ）してくれる仕事をこなしていた。赤ん坊（あかこ）の僕（ぼく）を泊（と）まりがけで預（あづか）かってくれる保育所（ほいくじよ）はなかつたし、そのうえ観光シーズンに入（い）るとなぜか、僕は麻疹（はしか）にな（な）ったり腸カタル（ちやうかたると）にな（な）ったりしていたからだ。

さほどおもしろい場所（ばしょ）とは思（おも）えないのに、町（まち）には旅行者（りょこうしや）があふれていた。川（が）が流（なが）れていて、城塞（じやうさい）（＝城（しろ）やとりで）と湖（うみ）があつて、バラの庭園（ていえん）がある。たったそれだけのものために人々（ひと）は、ママの旗（はた）の元（もと）に集（あ）合（あ）し、ママの説明（せ明明）を聞（き）きたが（が）った。

それはコウニンのガイドが持つにしては粗末すぎる、何の変哲もない旗だった。棒の先に、ハンカチ大のグリーンの布きれが縫い付けてある。僕が B ついた時分から、ずっと変わらず同じものだった。雨や汗や鳩の糞を吸い込み、グリーンの色は薄汚れてしまっている。正直、変な臭いもしていた。でもママが、「さあ皆さん。こちらに集まって下さい」と、旗を振りながらきびきびした声で号令をかければ、お客さんたちをちゃんと安心させることができた。博物館の展示物を指し示すのにも、役立った。

旗はママの⑤唯一の仕事道具と言ってもよかった。スケジュール、歴史的建造物の来歴、湖の面積と水深、トイレの位置、植物の名前等々はすべて頭の中に入っていた。ただ一本、旅行者を迷子にさせないためのママの印として、旗が必要なのだった。朝、旗をクルクルと棒に巻き付け、バッグに仕舞うのが、行ってきた時の合図だった。

ママは旅行になど行った試しがなかった。見知らぬ土地を訪れて、珍しい景色に感嘆したり、立派なホテルに泊まったこともなかった。なのに来る日も来る日も相手にしているのは、心浮かれた旅行者たちだった。彼らを案内して歩き、次の町へ送り出し、また新しい客を迎える、その繰り返しだった。残された僕たちは、結局、どこへも行けないままだった。

次の朝ママは戸棚の奥から壊れた折り畳み傘を引っ張り出し、仕方なく、代用品として持つて行った。

以来、不運な出来事が続きざまに起こった。旗をなくしたと関係あるのかどうかは分からない。どれも深刻、というほどのものではなかったが、ママの愚痴の時間を、煙草二本分に長引かせるには十分な問題だった。まず、ママの恋する映画スターがモデルと婚約し、そのシヨックからママの肋間（ろつかん）（II あばら骨のあいだ）神経痛が再発した。親切だった家主さんが隠居して、息子の代になった途端、家賃が値上がりした。そして僕は、自転車競争で転び、頭に怪我をした。

野球の練習がない放課後は、町中に設定したコースで友だちとレースをするのが、最近のはやりだった。Sホテルの

裏手をスタート地点とし、川沿いの遊歩道を走って橋を渡り、旧市街の入り組んだ路地をくまなく巡ったあと、時計台前の広場にゴールするのだ。脚力とコーナーワーク、観光客をよけるハンドルさばきが試される、難コースだった。

皆の自転車と違って僕のは中古品だから、デザインは時代遅れで車体も重かった。それでも僕は、最後の瞬間までブレーキを我慢する忍耐力には自信を持っていたし、実際五レースに一回はトップを取っていた。

ところがその日は、一瞬だけレバーを握るタイミングがずれたらしい。気付いた時にはスリップし、レストランの入口に突っ込んでいた。

僕はチェーンの切れた自転車を押して、シャツ屋の小母さんのところへ行った。彼女はママのたった一人の友だちで、旧市街の外れにシャツ専門の仕立屋を開いていた。ママがいけない間に困った事態が起きた場合、助けてくれる約束をしている小母さんだった。

まず、レジの奥の丸椅子に座らされ、作業台の上にあった裁ちバサミで、血糊のついた髪の毛をザクザク切られた。「嫌だよ。そんなに切らないでよ」

僕が抗議すると、小母さんは首の付根をつかみ、動けないようにした。「だってそうしなきゃ、傷が見えないんだもの」

「髪で隠れた方が、ママに心配かけなくていいんだ」

「嘘ばかり。本当は禿げるのが嫌なんでしょ？ 心配ないって。中の方の毛を、ほんのちよっと切るだけだから」小母さんは脱脂綿で傷を消毒し、早く乾くようにふーふー息を吹き掛けた。

「もう血は止まつてる。縫うほどの傷じゃないわ。さて、今日は何曜日？」

「木曜」

僕は答えた。

「じゃあ、63÷7は？」

「はい、よろしい。頭の中身も問題なさそうね」

小母さんは埃だらけの僕のズボンを払い、冷たいレモンソーダの缶を開け、飲むよう勧めた。シャツ屋という素っ気ない店の名前が示すとおり、小母さんはぶっきらぼうな人だった。ママの三倍くらい太っていて、声が低く、滅多に笑わなかった。けれど僕が困った事態でない時に訪ねても、必ずおやつをご馳走してくれた。

店はさほど繁盛しているふうには見えなかった。無愛想な雰囲気のためというより、ユニークすぎるシャツのデザインに、原因があるのではと思う。小母さんが作るのはすべて、本人の言葉を借りれば、「⑥不完全なシャツ」だった。もちろん、着ることはできる。生地の色や素材は豊富に揃っているし、縫製もしっかりしている。一見すると、ごく当たり前のシャツでしかない。ところがちよつとした所に、小母さんの施した不完全さが隠されている。例えば、ある木綿の白シャツは背中にポケットがついている。また別の開襟シャツはボタンホールのないボタンが一つあり、女性用のデニムシャツには、小さすぎてかぶれないフードがついている……、というような具合だった。

町の人たちはシャツ屋を話題にする時、あの店、と呼んだ。その口調には、冷笑、懸念、恐れ、好奇心、様々なニュアンスが含まれていた。

「ねえ、小母さんのお店、儲かってる？」

「いつだったか、質問したことがある。」

「ほどほど、だね」

作業の手を休めずに小母さんは言った。

「まあ確かに、うちのシャツを必要とする人間は、そう沢山いるわけじゃない。でも、ゼロじゃない。自分は生涯に一枚も不完全なシャツなど着ない、と信じている人だって、ある時ふつと思ひも寄らず、シャツ屋のウィンドーを覗いてしまう。ささやかな不完全を求めてね」

「ふうん」

小母さんの言っている意味が、僕にはほとんど理解できなかった。

「でも、お店にお客さんがいるのを、見たことがないよ」

その証拠に、今だったら口にしないだろう無遠慮な疑問を、平気で発していた。

「こっそりやって来るお客が多いの。注文書を郵便で送ってくる人もいるしね。たぶん、不完全なシャツを注文するところなんか、他人に見られたくないんだろうね」

不完全、と言いながら小母さんの仕事振りは緻密（＝細工が細かいこと）で洗練されていた。一枚の布が切り離され、縫い合わされ、少しずつシャツの形になってゆくのを眺めていると、飽きなかった。自分も一度でいいから、メジャーや、カーボン紙や、指ぬきや待ち針を使ってみたいと思った。

今では僕は、戸棚の中に、どれほどの型紙がストックされているか知っていた。その型紙の多くは、小母さんを変人呼ばわりしている町の人たちのものだった。またママが、不安な気持ちで出掛ける時、例えば養育費を送ってくれないパト、交渉しなければならぬような場合、必ずシャツ屋のシャツを着ることも知っていた。

僕はソーダを飲み干し、頭の傷に触ってみた。まだじゅくじゅくしていた。

「正直にママに報告するのよ」

小母さんは言った。

「当分、自転車は禁止だろうなあ」

「チェーンが切れているんだもの。乗りたくったって無理よ。自転車は小母さんが修理屋に預けておいてあげるから、今日は市電で帰りなさい」

「歩いて帰れるよ」

「頭を打った時はね、静かにしておかなくちゃいけないの。電車賃なら心配いらぬわ。さあ」

小母さんは僕に小銭を渡し、もう他に負傷箇所はないか、頭をあちこち押さえて確かめた。太くて温かい指が、髪の毛の中でもそそと動いていた。

『次の日曜日、送電線保全工事のため、十二時から二十四時まで停電します』、という回覧板が大家さんから回ってきた。

「全く、迷惑な話ねえ」

ママは洗剤で食器を洗い、僕はそれをゆすいでいた。

「日曜は運悪く、湖水地帯と川下りコースのツアーが入っているのよ」

「留守番できるさ」

僕は言った。湖水地帯と川下りコースはママが担当するツアーで一番所要時間が長く、帰りは夜の八時過ぎになった。

小さい頃は、シッター（子供の面倒を見る人）を頼んだり、規約違反は承知の上で、観光局に黙って僕をツアーに連れていったりしていた。でも最近では、どんなに夜遅くなる日でも、一人で留守番していた。

「だけど停電なのよ。日が暮れて真っ暗になったら、きつと恐くて泣きだすに決まってるわ」

「泣くわけないよ。蠟燭がある」

「駄目駄目駄目。子供が火なんて使っちゃいけないの。蠟燭が倒れてあなたのベッドが燃えてるところを想像しただけで、心臓が止まりそう」

頭の怪我にはほとんど注意を払わなかったのに、火の用心となると⑦俄然、ママは心配性になった。

「⑧日曜はママと一緒にツアーについて来て。そう、それが一番安全」

せっかくの日曜日、川下りなんかしたくもないし、野球の試合だつてある。僕にも予定があるのであり、ママの都合を押しつけられるのはたまらない。蠟燭もガスもちやんと使いこなせる。困ったことになったら、小母さんに助けてもらう。と、抗議したが、何の役にも立たなかった。一度ママがこうと決定を下したら、それを覆すのはほとんど不可

能だった。

「お利口にしているよ。特にバスの運転手さんには、礼儀正しく挨拶してね。運転手さんに嫌われて、観光局に告げ口されると困るから」

ママは一段と威勢よく、スポンジの泡を撒き散らした。

（小川 洋子著『海』一部改変）

問一 ①「不覚」……⑦「俄然」の意味として最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

①「不覚」

ア 油断して失敗すること。

イ うまくいかず後悔すること。

ウ 真実をあまりおぼえていないこと。

エ 正確さが足りず困ること。

⑦「俄然」

ア やる気に満ちあふれる様子。

イ 感情が高ぶる様子。

ウ 結論を出すのに慎重になる様子。

エ 急に状況が変わる様子。

問二——②「その日のため息は、一段と長く、暗かった」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ママは、遊覧船の待合室に、ずっと使い続けて身体の一部と言ってもいい集合用の旗を置き忘れてしまい、見つからなかったので、ショックを受けているから。

イ ママは、仕事から帰るといつもしばらくの間愚痴を言うのだが、身体の一部と言ってもいいほど長期間使ってきた旗をなくして、この日は特に落ち込んでいたから。

ウ ママは、仕事で昔から使っている、身体の一部と言ってもいいほどの旗をなくしてしまい、それを息子に話すために、質問してもらいたくてたまらなかったから。

エ ママは、ダイニングの椅子に座って、少しの間愚痴をこぼすのを習慣としていたが、この日は愚痴を長く言うために、息子の質問を待っていたから。

問三——③「どうしたの？」とありますが、この時の僕はどのようなことを考えていましたか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ママのため息がいつもより長く、暗かったので、心配になり、何があったかを質問して、気持ちを安らげてあげたいということ。

イ ママがダイニングの椅子に座り込み、煙草を吸いながら、「とんだ不覚よ」というのを聞いて、何があったか知りたいということ。

ウ ママの身に何か重大なことが起こったのではないかと、ため息の長さから判断し、不安になって、黙ったままできているということ。

エ ママが質問してもらいたがっているということを感じ取り、不機嫌になるのを避けるために、質問をしなければならないということ。

問四 — ④「僕は居心地が悪くなった」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ママの言う通りに夕食の支度をしたが、それは途中まででしかなく、仕事で疲れきったママが調理しなくてはならない部分がまだ残っていて、気まずかったから。
- イ 余分なエネルギーがこれっぽっちも残っていないかのようなママの様子を見て、最後まで夕食の支度をやり遂げるべきだったと後悔していたから。
- ウ 家では、火を使うには子供すぎると言われ、夕食の支度を最後までやらせてもらえず、野球の練習試合は途中で抜けなければならず、居場所がないと感じたから。
- エ 夕食の支度をママの言い付け通りしたつもりでいたが、余計な手出しをしてしまい、上手にやれなかったために、ママのやるべきことが残っていて、申しわけないと思ったから。

問五 本文中の A・B に入れるのにふさわしい二字の熟語を、それぞれ「」の中の漢字を組み合わせで作きなさい。

A 「家 算 計 暮 旗 生」

B 「体 語 物 人 身 心」

問六 — ⑤「唯一の仕事道具と言ってもよかった」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何の変哲もない粗末な旗であったが、それを振りながらきびきびした声で号令をかけて、お客さんたちを安心させることができたから。

イ 旅行者を迷子にさせないための印として旗は必要であり、公認観光ガイドの一人としてずっと使い続けたものだったから。

ウ 大声でお客さんを誘導する際に旗を使うが、ガイドに必要な情報は記憶しており、それ以外のものは必要なかったから。

エ 難しい試験にパスした公認観光ガイドとして、スケジュールなどの情報はすべて頭の中に入っており、旗以外の道具は一切使わなかったから。

問七 — ⑥「不完全な」とありますが、なぜそのように言えるのですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 細かいところまで注意が行き届いて作られ、普通のシャツのように見えるが、実は十分ではなかったり、余計なところがあつたりするから。

イ ぶつきらぼうな人柄ひとがらがシャツのデザインにも表れていて、すべてのものにポケットやボタンやフードなど余分なものがついていてから。

ウ 生地きじの豊富さやしつかりした縫製ほうせいに自信を持っているため、自分のデザインにこだわり過ぎて、町の人に良く思われていないから。

エ ほどほどに儲もうかっていて、自分の作りたいシャツを作り続けていくことに満足しており、町の人たちに変人呼ばわりされても気にしなかったから。

問八 — ⑧「日曜はママと一緒にツアーについて来て」とありますが、この時のママはどう考えていたのですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ツアーに自分の子供を連れていくのは規約違反いはんになってしまっているので心配ではあるが、それが一番安全だと考えている。

イ 子供の安全のためには一緒にツアーに連れていくのが一番だと判断し、お客さんが観光局に告げ口することのないように対策を考えている。

ウ 蠟燭ろうそくがあると子供に言われて、火事になることを想像して心配になってしまい、何とかしなければならな
いと考えている。

エ 停電の中、蠟燭を使って子供が帰りを待っていることが心配で、ツアーに連れていくのが最も安全だと考えている。

問題は、ここからです。

国語

(二期A)

解答用紙

受験番号

得点

*

一	
⑥ ラクセイ	① 立役者
⑦ ソウジョウ	② 逆手
⑧ サイブン	③ 悪寒
⑨ ケイソツ	④ シンコク
⑩ ジョレツ	⑤ ダンゼツ

*

二			
問八	問六	問二	問一
⑦			と考えている。
	問七	問三	
⑧	A		
		問四	
	B		
		問五	
	C		

20

*	*	*	*
---	---	---	---

三		
問六	問四	問一
		①
問七	問五	
	A	⑦
問八	B	
		問二
		問三

*	*	*
---	---	---

*印のところには何も書かないこと